

◇1. 仏教とは…… 聖道門の仏教、浄土門の仏教……お釈迦さんの悟りで人間観が革命的变化
聖道門仏教(浄土教以外):出家した求道者が身と心を修めて菩薩となり、菩薩が成仏する。

◇2. 浄土門の仏教、浄土教のとは、浄土とは磁場に似たようなもの
無量光(智慧)と無量壽(慈悲、いのち)

◇3. なぜ「南無阿彌陀仏」なのか? 法然上人の答え(1)仏意測りがたし、(2)簡単、(3)智慧といのち
「浄土はどこか?」「ここが浄土の南無阿彌陀仏」;妙好人才市

阿難が初めて釈尊の相に仏仏想念の相を感得して、驚き、釈尊に問う。仏が分かるのは仏と同じレベルの菩薩にしか分らない。(仏説無量寿経) 悟っていない人にも受け説ける仏教、浄土の教えを説く。
法蔵菩薩の物語:国王が世自在王仏に出遇う。自利利他を自由自在に生きる仏。国王としての理想
国王⇒出家、法蔵比丘(求道者)、世自在王仏の教化を受け、法蔵菩薩(自利利他)となる。48の本願を建て、成就して阿彌陀仏の国(浄土)を建立。阿彌陀仏(自利利他円満)と成る。

本願とは (1)「設我得仏、国に地獄・餓鬼・畜生(三悪道)あらば、正覚を取らじ」

わが国(浄土)には地獄餓鬼畜生はいない。…三悪道を作っているのは皆さん凡夫ではないでしょうか。

◇4. 人間として生まれた意味??? 生きることの意味、物語(人生とは)、「死」とどうとらえるか? 物語?

◇5. 浄土とは? 往生浄土とは?

◇6. 生死(しょうじ、迷い)を超える仏教

#01. すべての民族は豊かな生活を目指した。……豊かな、幸福な生活(仕合わせ)

民族宗教から、世界(普遍的)宗教へ

宗教は原始民族の社会から文明社会に居るまで、様々な形態をとって現れているが、それを「民族宗教」(原始宗教)と「世界宗教」(歴史宗教という二大類型に分けることができる。(大峯顕) 世界宗教(普遍性、個人性)は、一人の個人によって創設された(開祖)。教典・教義がある。社会の共同体とは別に、教団を持つ

#02. 多くの人は「幸せ」、広辞苑では「仕合わせ」……相対的・絶対的

三木清「人生論ノート。幸福とは人格である。いろいろな幸福論あり

#03. 医療「健康で長生き」、生きる意味、方向性、生き甲斐……生きるための手段・方法・工夫・方法
「パンセ」パスカル著:明日こそ、明日こそ幸せになるぞ、と死ぬまで幸せになる準備ばかりで終わる
尺取虫の譬え、みずすましの詩……空(虚)しさ、蚕の譬え(孤独)…長生きしたのが一番悪かった
受け身的に生まれてきた。自我意識が発達するまでは全面的に受容……悩むことはない
生きる目的? ……「人生の意味」など

#04. 仏道に2種あり。聖道門仏教と浄土門仏教……聖道門が長い間、正統派、主流であった。

聖道門仏教(仏を証明する道)……出家(戒律を守る)……身と心をおさめる

法相宗:1. 資糧位、2. 加行位、3. 通達位(悟り、信心)、4. 修習位、5. 究竟位(仏)

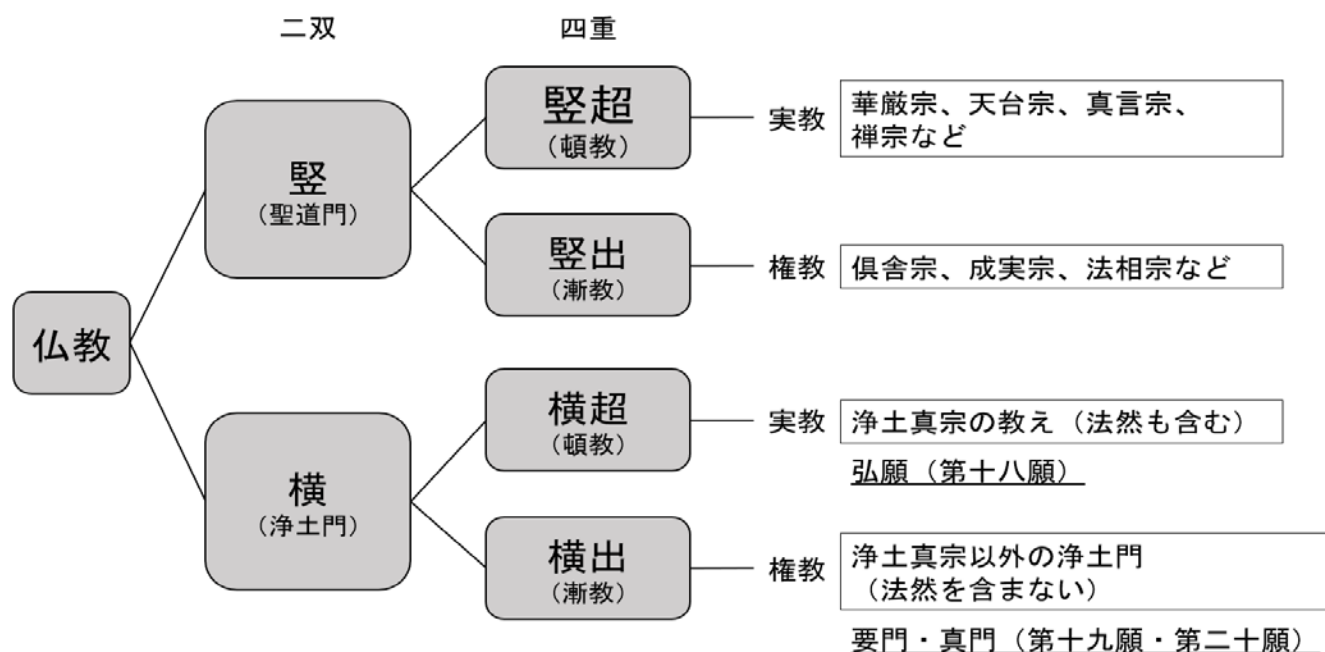
浄土門仏教(信ずる道。信は澄浄心、浄化)……智慧(仏の智慧、無分別智)をいただく道

時・機相応の教え 正・像・末(末法)。出家者(世俗から離れて戒律を守る)がいなくなり、

在家仏教(家庭を持つ)が大多数。明治4年、政府は、僧侶は家族は持っても良い(法律を制定)。

二双四重：親鸞は仏教の菩提心を四つに分類し、末法の世界では聖道門の教えは正しく伝わることはなく、凡夫がそのまますぐわれる道は、阿弥陀仏の本願を聴き、仏の心に触れ、信心をいただくことの他はない。

なお、『教行信証』における二双四重の教判は、「二権(ごん)二実(じつ)」(二つの方便の教えと二つの真実の教え)の相対判(そうたいはん)であるが、『愚禿鈔』においては「三権(ごん)一実(じつ)」(三つの方便の教えと一つの真実の教え)として、横超のみが真実の教えとする絶対判(はん)となっている。図示すると以下



横(他力)・堅(自力)、超(頓教)・出(漸教)を組み合わせ、釈尊一代の仏教を横超・横出・堅超・堅出の4種に分類している

◇①「横超」。他力浄土門の中の頓教。

阿弥陀仏の本願力によって往生と同時に仏のさとりを開く弘願他力の教法。

◇②「横出」。他力浄土門の中の漸教。

他力によりながらもなお自力心が残っていて方便化土に往生する要門、真門の教法。

◇③「堅超」。自力聖道門の中の頓教。

一念頓悟(段階を経ずただちにさとりを開く)、即身成仏を説く華嚴・天台・真言・禪の教法。

◇④「堅出」。自力聖道門の中の漸教。

自力による長時の修行によって漸次にさとりを開こうとする小乗や法相宗などの教法。

#05. 浄土門仏教(浄土教:浄土宗、浄土真宗、融通念仏宗など)

浄土三部経(無量寿経、観無量寿経(無量寿仏観経)、阿弥陀経) + 浄土論(天親、世親) 浄土論註(曇鸞)

仏道は、人間性を回復する道。(世俗の法律、世間的倫理・道徳、宗教)

六道:地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天界……心は六道を輪廻して迷いを繰り返している。

地獄:居り場所がない、居ても、立ってもおれない(熱・寒地獄)(戦争)

まず「人間になろうよ!」、これでよいのかと考える。迷いの六道を解脱する。

人間として自覚(目覚める、自利、声聞・縁覚(阿羅漢、自分の悟り。目覚めを目指す)へ

菩薩(自覚・覚他、自利・利他)……他へのはたらきかけをする。願いを以て他の人へ勧める。

宇佐神宮:八幡大菩薩…平田崇英の話;「神仏習合で宇佐神宮が売り出したら困るのではないですか?」

仏(人間として成熟して、完成した状態。自覚覚他覚行窮満、自利利他円満)

#06. 仏は、衆生の手を借りないで、仏は仏自身を証明される。どのようにしてかというと、「なるほどあなたは仏である」ということを納得せしめる形で、仏は仏を証明する。どうすることか？ それは衆生を教化するという意味である。衆生を教化してさとしめるという形で仏は仏自身を証明される。

その教化を蒙ったということを「信ずる」というわけです。仏の教化を蒙った、「なるほど仏でおわしました」とうなずくことが「信ずる」ということです。その教化の意味が「光明」という言葉で表わされているわけです。

「光明無量」ということばは、教化の至らぬ所はなしという意味です。仏の教化にあずかって仏を信じるわけです。仏の教化にあずからずに仏を信じるなどということはあり得ません。

第一深信:「深心(じんしん)」といふはすなわちこれ深く信ずる心なり。また二種あり。一には決定(けつじょう)して深く、自身は現にこれ罪惡生死(しょうじ)の凡夫、曠劫(こうごう)よりこのかたつねに没(め)つねに流転(りゅうてん)して、出離(しゅり)の縁あることなしと信ず。二には決定して深く、かの阿弥陀(あみだ)仏の、四十八願(しじゅうはちがん)は衆生(しゅじょう)を摂受(じゅじゆ)したまふこと、疑(ぎ)なく慮(おも)んば(か)りなくかの願力(がんりき)に乗じてさだめて往生(おうじやう)を得(え)と信ず。

自分は煩惱を抱え、自力では迷いを離れられない身だと深く知らされた

#07. 仏の恩徳……恩徳讃

恩徳というのは、仏の持っているお徳です。断徳と智徳と恩徳

断徳:一切の煩惱を断ち切っている。 智徳:一切の無明を離れているという意味で智慧の徳がある。

恩徳:如来の大悲、如来の恩徳という場合には、我がためにこの法をお説きくださっているということがなければ恩徳というようなことは出てこないわけです。

#08. ヘレンケラー「暗黒の世界から解放された」、物には言葉がある。言葉 : 知識、思考できる。

分別思考……分別のある人(物事の是非、善悪の常識的判断ができる人)

無分別智、仏の智慧(仏智)。「無」という意味は超えるという意味

思考の次元が高くなる。低次元で解決のつかない事柄は、思いもしない発想で解決へと導かれる

#09. 無分別智が分かったと「殻の中に居る」と気づく……牢獄、そしてそれから解放された世界

#10. 仏法の位置づけ

水平思考から垂直思考へ(内観)次元が変わる。

唯識の見る人間の意識構造

末那(マナ)識 : 煩惱、考え方の迷い(◇1. 我痴、◇2. 我見、◇3. 我慢。◇4. 我愛)

阿頼耶(アラヤ)識 : 蔵識:知識・経験・記憶として貯められる。その経験を蔵に貯え、全体的に名聞・利養・損得をできるだけ総合して考え、そこか外への発言・行動となる。

#11. 南無阿弥陀仏の心 : 呼びかけ、呼び覚まし、呼び戻す

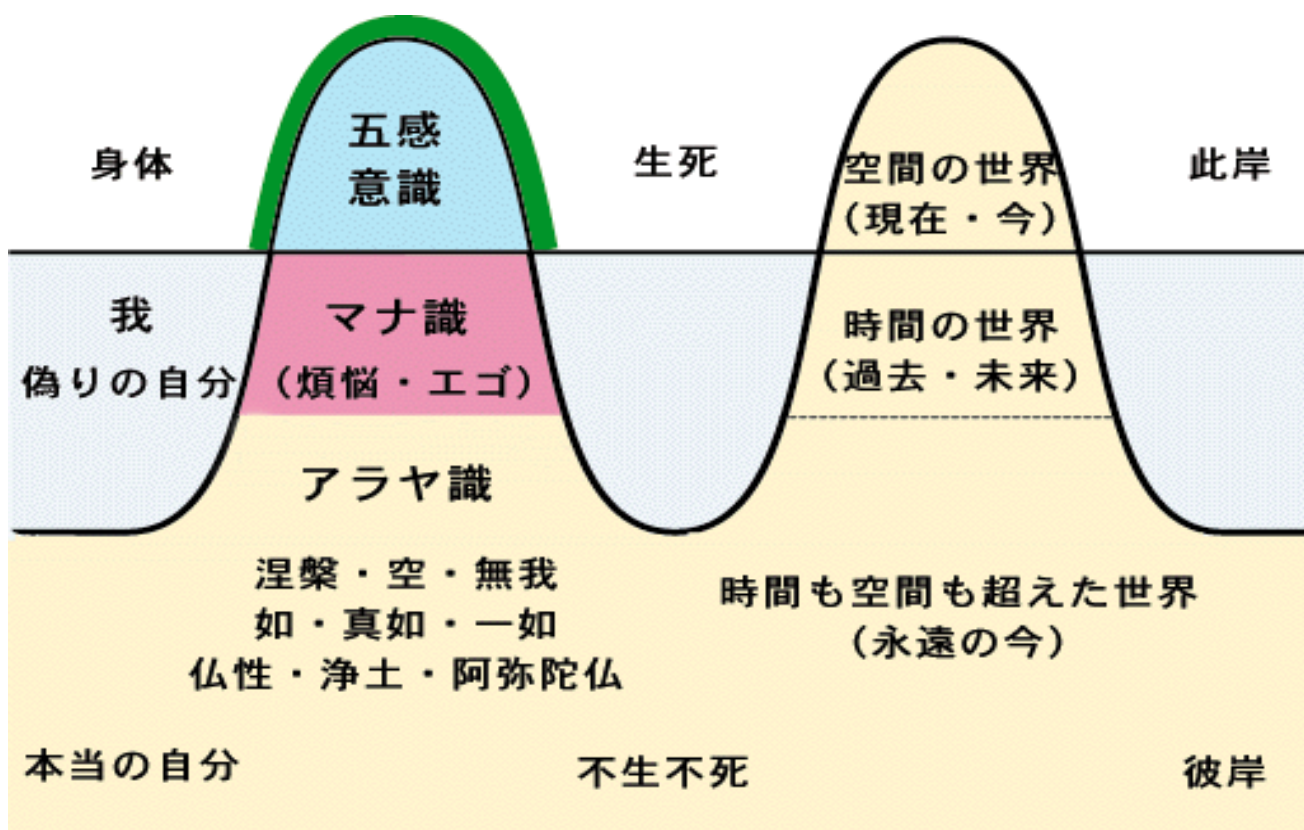
「汝、小さな殻を出て、大きな世界を生きよ」

#12. 聖道門について遠慮会釈なく言われたのが法然上人です。「それは捨てるために説かれたのだ」と。「廃立(はいりゅう)」というのは、一方を廃し、一方を真実として立てるという意。法然は聖道・浄土、正行・雜行、正定業・助業の廃立を説く。それによって何を教えようとされたかと問われます。

我々の立ち場が、はじめから仏の智慧を疑っている。「仏智疑惑ということの上に立ちながら、仏を証明しようとする内容をもっている。つまり、我々の存在が仏智疑惑の存在である。我々の立場が、仏を疑うということのほか何も出てこない存在であるという自分に気付かせるための方便という意味があったんだと。自分への目覚めを教えようとなさったのだと。これは弥陀の本願ということがもとにならないと出てきません。

「捨閑閑抛(しゃへいかくほう)とは、『選択本願念仏集』の「二行章」の「雜行を捨てて」(七祖篇 1191)の

「捨」と、「念仏付属章」の「定散の門を閉づ(閉定散門)」(七祖篇 1274)の「閉」と、「三選の文」(七祖篇 1285)の「聖道門を闔(さしお)きて」の「闔」と「もろもろの雑行を抛(なげす)てて」の「抛」を合したものです。



#13. マルチンブーバーの「我と汝」

公教育で物事を客観的に正しく見ることの訓練を受けて来た。「対象化が迷いの大本だ」細川巖師
人間性の回復 「私—あなた(you)…「私—それ(it)、彼女・彼氏(he,she)」

通じ合うということ : 賢善精進だと、これは賢を誇り、善を誇り、精進を誇っていくわけですから、方向としては通じないわけです。仏の教化を受けた証拠が第一深信であると。[地獄は一定], すみかであると。これは「愚か」がという意味あって通じあっていく部分がそこにある。仏の教化を受けたということは、まずそこに「通じた」という意味があります。そして仏と通じたということが他と「通じる」という意味を持っている。

自分の人生が友と通じ、仏によって認められ、仏と通じるということを華をもって表したわけです。泥の中をはいずり回って消えていくだけの自分、自分の人生に意味を見出せない私が、無理をするわけでもなく、全く自然に自分の人生を受けとめ、自分の人生に意味が見いだせるということが仏と通じたということです。仏に認められた。「仏を信じる」ということはそういう意味をもって来るわけです。

#14. 真実功德 (功德とはものに備わっている性質、はたらき)

「真実功德」と言われる内容は、本願の名号です。その本願の名号は、如来を信ずる道をあらわしたものです。つまり、如来の教化を蒙って、我々が如来となるという法が、本願の名号の法であり、そして如来を信ずる道であると。如来を信ずるということは、如来の教化を受けて我らもまた如来となる。そういう法が、「真実功德」といわれるものであると。

#15. 名利心 我々の立っている社会というのは上を目指しています。その一番上は無上です。「この上もない」のですから、一番上は仏を表わします。我々の世界にあって上ということになると、だいたい「天」が上になります。「天下をとる」というばあい、やっぱり上を目指すわけです。何故天下といふかという、そこ

へ行けば下が全部見渡せるから天下というわけです。天下人の上にまだいるのです。雲上人というのがおりまして、雲の上にいる。天を形成しているのは何かというと、それ名利である。名利という点からすれば、一番上は天になります。それを超えていくというところに仏の世界というものは考えられたのです。伝教大師が仏教というものを表わすのに、加茂川よりも高い所に仏教を開いたのです(比叡山)。(名利の基本的な意味は「名」=名声・評判・地位など、「利」=金銭的な得、実利、権力などの利益。)

#16. 依るところなし 一番上が仏なら、仏を証明する道ですから、なかなか困難です。

我々にはよるところがない、多くの者がいるところはやはり三途というわけです。三途とは地獄・餓鬼・畜生で表現されてきました。インド人は地獄を寒地獄・熱地獄だと表現してきました。じっとしていられないということです。針のムシロという表現があります。そこに安住できない。

我々の世界は人間性をうしなって地獄・餓鬼・畜生を限りなく生み出していく場です。それが我々の住んでいる場です。そこに仏の法に依れ、仏法ということが出てくるのです。居ることのできる場なのです。

地獄・餓鬼・畜生を生みだす場には、居ることができない者が、仏の法に帰すると、その場に居ることができるようになったという意味で、法がよりどころという意味を持ちます。

#17. この世を立てる この世は名利を法とし、煩惱の法を依りどころとしていますから、ここには立てない。立てないということが良くわかった。機の深信です。ここは地獄・餓鬼・畜生を限りなく生み出していく場、それ以外にない。そうははっきり知ることができたということが、阿弥陀仏の世界、浄土の世界こそがわれらが立てる場である。この世は人を消していく場、人が消えていく場です。そういう意味では、阿弥陀仏の世界が見出されたということは通じ合い、認め合うことができた。

要するにそこには「人」とか「華」(イキイキとその人ならではの輝き)という意味が出てくるのであって、この世界に人と華という意味は出てこない。消していき、消えていく世界です。だから、「地獄は一定住みかぞかし」という言葉が出てくるのです。ここは地獄のほかないと。このように了解できた。

「地獄は一定」と言い切られたということは、逃げるのではないですね。そこにこの世界のほかに極楽世界ありと認められた。認められたからこそ、親鸞は「世の中安穩慣れ、仏法ひろまれ」(東 569)という慚愧心をもって、この世を生き抜かれたのです。

本願の法が説かれたということによって我々のあるところは立てる場でもなければ、人となる場でもないのだ、限りなく地獄・餓鬼・畜生を生み出していく場だと分かる。だから、「弥陀の法に依れ」という、そういう法が出て来たわけです。だから、本願の法に帰依したということは、この場の他に我らの立つべき場というものがあった。通じ合う、認め合う、人と成る、そういう場。そういう場という意味があるものですから、この法を表わされるのに国土をもって表される。

縁起の法、自由、目覚め・気づき:「さるべき業縁の催さば、いかなる振舞いをすべし」……歎異抄

#18. 不回向、真宗は不回向だ

布施ができる者のための宗教であったのが、貧しくと、能力がなくとも、世間的地位に関係なしに等しく同じく如来からの回向があるのだと。それを「阿弥陀仏と言うはその行である」と言われるのです。「南無と言うは帰命なり、またこれ発願回向の義なり」の、この発願回向です。仏の方が発願し回向しているのだと。その場合、仏の所にあった功德というものが、方向を転じ、内容を転じて、我々の信となる。仏に遇って覚りと呼ばれていたものが、内容と方向を転じてわれわれの信となる。それが法然の言う不回向です。われわれの方が回向を用いる必要がない。

#19. 思いもよらぬ

天親菩薩は「無量寿経」の本願の名号によって尽十方不可思議光如来に一心に帰命したてまつった。この「不可思議光」ですが、不可思議というのは、「わからない」という意味ではないのです。「思いもよらない

形で実現していた」ということです。というのはわれわれの方で仏を考えますと、一応、イメージします。仏というのは漠然とながら「こういうものであろう」と考えます。仏というものを対象化して考えます。しかし、出遇って見れば、思いもかけない形で仏ということは「はたらき」としてあるわけです。もっと言うなら、自分が明らかになり、自分が信じられるという形で仏はおわしましたとは、思いもかけなかった。そういう意味がこの「不可思議」にあります。現実には、自分自身が明らかになるという形で仏がおわしました。

20. 往生のとらえ方

往生ということを考えるに二つのあり方がある。20 願という立場に立って考えられるものを「難思往生」としている。その難思往生という場合、やはり我々の心の延長線上(自利のはからいが残っている)に往生ということが考えられているのでしょう。難思議往生という場合には、やはり、思いもかけない形で予想を翻して往生ということが実現している。ですから、そこに翻るということと、翻らずに延長線上に考えるということの違いをお立てになられたと思います。真宗というのは、「仏にすがる」という方向ではなく、「すがる心が翻る」「翻って仏に遇う」ということです。

21. 翻(ひるがえり)

煩悩をどうにかするとかいうのではなく、そこに「翻(ひるがえ)る」ということが示唆されているかと思うのです。そのことを考える立場です。考えている立場が行き詰まっているのですから、考えられていることが行き詰っているのではないのです。「**考えている立場が行き詰まっている**」のですから、その立場自身が翻るなら、それは不断煩悩得涅槃ということになります。そういう点では、真宗というのは、「翻って帰する」のです。

無碍の光明というのは、我々の煩悩を邪魔しない。したがってそれは我々の立場を翻すという意味があります。翻すところに教化を受けるという意味があるわけです。無碍の光明を大慈悲という。浄土の「性」は何かというと、大慈悲こそ浄土の性であると。ですから浄土とは、「正道の大慈悲なる出世の善根より生じたものである」と、こう読まれ偈文です。

22. 大慈悲心 曇鸞は「智度論」によりまして慈悲に三種類があるといい「衆生縁」と「法縁」と「無縁」とであると。(東 315、西 359) 無縁の大慈悲なるものが浄土の性であると述べていらっしゃいます(東 316)

愛情は「場」というものをあらわすのです。何故なら、われわれが立っておられるということです。愛する者を失った時、われわれは立って居れないということがあり益。つまり人間が立っておられるということはどこかに愛が感じられる。愛情を感じることができれば人間はそこに立つことができる。そこにいることができる

信国淳先生の経験で、夫婦のいさかいの場を目にしていた(母が大風呂敷を広げ、荷物を詰めていた)。そういう場に子供としておれない、その感覚が「根なし草」の在り様であったというのです。

家庭であろうと、学校であろうと、職場であろうと、そこに愛が感じられれば人間はいられます。生きていこう、やっぺいこうという気になります。そこが自分の場になるわけです。

23. 無縁大悲 大悲を無縁という言葉で表わします。この無縁ということを積極的にいえば、われわれを何の条件も必要としないで受け入れ、認めるものをいうわけです。曾我量深先生はこれを善導大師の機の深信の文の「出離の縁あることな(無)し」から「無縁」とみなければならぬというのですが、これは卓見です。

仏の大悲だけは条件を問わない。どのような者であっても条件を問わない。そういう意味で無縁なのです。何の手掛かりがなくても、何の関係がなくても、仏はその衆生を認め、受け入れる。そこに愛情が感じられる。そうすると、そこがその人の場になるわけです。

24. 志願広大

浄土に生まれたということは、そこに「志願広大」といことがある。この点ですね。浄土は、われわれが受

け入れられ、認められるということがある。そして、そこに愛が感じられれば、それに報いよう、それによって生きようという心が起きます。それが志願です。知恩報徳といわれるのは、そういう志願をあらわします。

フランクが書いた『夜と霧』は、ナチスの収容所での経験が述べられたものですが、その収容所で誰が早く死んでいくかといえば、だいたい若い人が多い。どうしてそうなったのだろうかということの子細に尋ねて行って、フランクは大きな転換をされるのですが、ああいう過酷な状況に耐えられたのは、自分を必要としている者の存在を感じることができた人なんです。要するに、愛を感じることができた者が、あの過酷な状況に居られたというのです。死ねない。外では私を待っている人がいる。私を必要とする者がいる。そういうふうに感じられるものをフランクは希望という言葉で表していたかと思うのですが、要するに愛情なんです。「あなたが必要です」と感じられるということは、愛情が感じられているわけです。

「人生に何をしていくかということではなくて、この一日一日の人生が私に何をせよというかを聞いていこうとする生活態度」です。自分に何ができるか、この人生で何をしていかなければならないか、というのではない。この一日が私に何をせよとこの人生を言おうとしているのか、それを聞いていこうとする生活態度を、かれはコペルニクスの転換という言い方をしています。

浄土の往生という事柄は、今申しましたように自分が認められ、自分が受け入れられるという、その愛が感じることが場になる。そしてその場は、私的なものを越えた場であり、その場に触れた事柄が曇鸞が言うように志願、衆生の心の行、心行が広大であるという意味である。浄土が広大であるという意味は、衆生の志願が広大である。衆生の心行が広大である。仏恩報謝というのはそういう意味であると。愛が感じられるから、それに応えていこうとする。応えずにはおられない。そうすると、志願広大ということから、無上涅槃ということが了解されると思うのです。

25. 自由(自らに由る): 仏教の言葉……国王ありき、仏の説法を聞きて、心に悦予を懐く(仏との出遇い)

自由というのは、もともと縁起の法、自分を取り巻く環境を良いとか悪いとか分別せずに、これが私の引き受けるべき現実、南無阿彌陀仏とお念仏で受け止めて、そこで精一杯、尽くして、後は仏さんにおまかせします。

「置かれた場所で咲きなさい」 渡辺和子(カトリック修道女・元ノートルダム清心学園理事長)

「ない物を欲しがらずに、あるものを喜ぼうよ」 河村とし子さんの姑の口癖

「天命に安んじて人事を尽くす」 清沢満之、大谷派の明治の学僧、大谷が大学初代学長

「この秋は、雨か嵐か知らねども、今日の勤めに田の草を取る」 二宮尊徳(道徳家)

森本あんり(神学者・元東京女子大学学長)が自由について、「我がまま勝手というのは感情やおもいの奴隷、囚われの姿だ。本人は自由だといっているかもしれないけれど、感情やおもいに囚われている姿です。隷属されている姿です」と書いている。「人間の欲望には限りがなく、世界は有限である。だから人間が近代的な意味で充足することはあり得ない。人生には、自分の手で何かを『掴み取る』だけでなく、『与えられる』という感謝の感覚が枢要である。文化(culture)の深みには、宗教が織り込まれているのである。

法蔵菩薩のはたらき(延塚知道師の講演録):「意を先にして承問す」とは、これは、私達は娑婆にあることしかわからん。生活のことぐらいいか頭に上ってこない。ところが、「国王を捐てた」というところから始まっているから、つまり、娑婆のそういう考え方や、娑婆の金とか地位とか財産とかいろんなことは、本当は私達が求めてるんじゃないんだと。本当～に求めてるのは、例えば、この娑婆を超えた浄土を求めてる。あるいは、生まれてきて最初のときに体験したように、「分別のない一如の世界にもう一回帰りたい」と。それが衆生が求めてるということを知って、僕らよりも先に法蔵菩薩の方が知っているから、あなたが求めているのは金や地位や異性じゃないのよと、本当は「浄土を求めてる」ということを先取りして教えてくれているという意味です。

縁起の法で生かされている、支えられている、教えられている、願われていることで、生きている間は必ずはたす役割、使命、仕事がある。

死に直面している人への言葉かけ、(1)お任せする。(2)仏さんがいらっしゃる。(細川巖師)

26. (私の蓮如さん)「罪業は深重なりとも」金龍 静著、ひとりふたり、くらしと仏教99年冬、法蔵館、(前略) 十年ほど前、福井県板井郡のある寺院で過去帳を見る機会があった。各年は、半紙1枚ほどの死者数だが、天明期には、2年にわたって数十枚の紙数が費やされていた。どのページも、法名・俗名・年齢の単調な羅列。だが、さすがは町の文化財。どんな小説より圧倒的な迫力をもって、無言の告発していた。まず子供たちが、続いて老人が、女性が、ダツと無機的に記されている。これはおとぎ話ではない。二百十年ほど前だからおよそ六・七代前の先祖の人々が、実際に体験した事実である。おそらく、「清く、正しく、美しく」がモットーの家庭は、まず全滅だろう。人の物を盗んででも食いつなぎえた者だけが、生き残る世界。平成の私たちに命をつないでくれた先祖は、親殺し・子殺し・妻殺しの地獄図の中をくぐり抜けてきた人々だったのである。外国のある報告書では、この種の体験者は、容易に生殖機能を回復できず、自滅の道を進んでしまうケースが多い、と記されている。

深すぎる心のキズを負った北陸の人々は、ボロボロになったいのちを、いかに癒していたのか。当時の人々にとっての教典は、蓮如上人の「御文」(御文章)だけであった。暗記しているものといえば、「たとひ罪業(ざいごう)は深重なりとも、かならず弥陀如来はすくひましますへし」のほかには、どれほどもない。頭の中ですますことが可能な「機」の深心の理解ならば、どんなに幸せなころだろう。「罪悪は深重」そのものの地獄図を体験した人々は、「かならず弥陀如来はすくひまします」のわずか十数文字だけを唯一の支えとして、以後の過酷な人生を、かろうじて生きぬいていった……と、私は思っている。

27. 仏の教化を受けた証拠

間違いなくそれは仏の教化であったという証拠は何であるかという、いわゆる第一深信なんです。「決定して自身を深信する」と善導大師が言う第一深信です。これを真実信心というわけです。真実だという意味なのです。教化を受けて、自分のことが知らされた。その知らされた内容は真実であったと。そこに「仏を信ずる」ということが、「我が身を深く信ずる」ことだという意味を持った真宗の要というものが出てくるわけです。

その点で、仏を信ずるという内容は、如来が利他の存在だということです。他を教化なさる。何をもって教化なさるのかというと、南無阿弥陀仏という名号の法をもって教化なさるのだと。それが利他だという意味を強く表わす場合に、「本願の名号」と「本願」がつくわけです。本願という意味は、利他を言うための言葉です。本願の名号ということがもともになるから、われわれに仏を信ずるということが可能になるのです。

そして、これが仏が衆生を教化する、仏が衆生を利他するということです。我々の方に何の準備もありませんし、努力もいらないのです。仏が衆生を教化する、その教化に遇うか遇わないかというだけが問題なのであって、その教化に遇うための準備とか、努力とか、そんなものは何にもいらないのです。

28. 本願

なぜ故に仏が我々に代わって成就なさったのかというと、我々は疑いを通して、いつの間にか我が力によって我が身を助け遂げることができるという邪見・傲慢の中にあったということ。それは全体が嘘であった我々、嘘を本当にして生きようとしている我々の在り方に対して、嘘は嘘だからみとめられない。許さないとするのが本願です。我々は本当でない、邪見・傲慢に立って生きようとしている。その上で「信じられない、そんなバカな話があるか」と言っておる。我々の根っこは邪見・傲慢であったと。そしてそれは誰かが壊すわけでもなし、抑えつけたわけでもなくて、嘘は嘘の故に成立しないという、そういう翻りが起こるわけです。こういう翻りの構造を本願ということで表わしている。